

《研究ノート》

感性を表現学的に研究する注意点

一日英言語文化論の視点から一

吉村 耕治

1. 可能な限り、「擬音語・擬声語・擬態語」を区別しましょう！

オノマトペは、フランス語からの借用語で、英語では *onomatopoeia* と呼ばれ、人間や動物が発する声を真似て言語化された *voice onomatopoeia* (擬声語) と、モノが発する音を真似て言語化された *sound onomatopoeia* (擬音語) に区分される。英語の *onomatopoeia* やフランス語の *onomatopée* の語源は、ギリシャ語の *onomatopoiia* で、*onoma*(t) (名称・言葉) + *poiein* (～を作る) = “the making of words” を意味する。

擬音語と擬声語に対して、状態や心情のように音声が生じていないものを言語化した擬態語は、英語ではギリシャ語からの借用語で「模倣」(imitation) を意味する *mimesis* や *a mimetic word* と呼ばれる。つまり、英語では擬音語は *onomatopoeia* と区別されている。

日本では小野正弘 (編)『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』(2007) や山口仲美 (編)『擬音語・擬態語辞典』(2015) が発行されており、「擬音語・擬態語」という表現がしばしば見られ、擬音語と擬声語が区別されていないことが多い。小野正弘 (2015: 9) では、オノマトペは「いわゆる擬音語と擬態語の総称」と言及されている。ところが、『デジタル大辞泉』で擬音語を引くと、擬声語を見るようにという指示があり、擬声語の定義が、「動物の音声や物体の音響を

言語音によって表した語」となっている。その用例として、「わんわん」「ぎあざあ」「がらがら」が挙げられ、補足的に「なお、広義には擬態語を含めていうことがある」という現状が述べられている。

柴田 武 (1995: 101) においても、「外界、自然界のオトやコエをことばの音で写し取ってつくったことばが擬音語である」という定義を行っており、擬音語と擬声語の区別が行われていない。

本来の擬声語と擬音語の区別は、「生物と無生物」、擬音語・擬声語と擬態語の区別は、「実際に音声が発せられているか否か」という相違になっている。国際的に通用する研究を行うためには、擬音語・擬声語に加えて擬態語が豊かであるという日本語の特徴に注目しながらも、研究の進め方を国際化する必要がある。

2. 感性の意味を理解し、感覚と感性を区別しましょう！

中島 (2017: 51) が指摘するように、感覚や感性は、「無定義術的に用いられているように見え」、特に感性は、「その内実がとらえにくい概念」である。

そこで、感覚表現と感性の表現の違いを確認しておきたい。感覚表現とは、人間の身体的な五感 (視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚) をつかさどる五官 (目・耳・鼻・舌・皮膚) を通して感じたことを言語化した表現を意味する。人間の五官を通して得られた感覚情報の信号が、それぞれの神経系を通して脳の視覚野や聴覚野、味覚野、体性感覚野などに伝えられ、脳の中で記憶を司る前頭葉などにも交信されて感覚が成立し、色々な感情が呼び起こされる。各自が脳で受容する情報

は、個人の経験によって異なり、微妙な差が生じやすい。私たちの感覚が人間生活と深く結びついた時に、感性となる。

つまり、身体的な感覚は、人間に普遍的な共通要素であるのに対し、感性は、それぞれの人が暮らす地域の風土や、時代の影響を強く受けている。そこで、感性は、文化的評価と深い結びつきを持っている。感覚に人間生活、つまり、文化的要素が加わると、感性になる。

ことばは生きており、常に時代とともに新しい感性の表現が創造されている。

3. 新しい「感性に訴える表現」には常に、注目しましょう！

2015年3月25日に、2014年に開催された傘踊りの「第50回鳥取しゃんしゃん祭」(以下、下線筆者)が、踊り子1688名の一斉踊りで世界記録に認定されている。鳥取県の「しゃんしゃん傘おどり」は、「鳥取しゃんしゃん鈴の音大使」の造語に繋がっている。この「しゃんしゃん」は、鈴の音を表す擬音語である。

NHK「みんなのうた」2016年10月～11月の曲に、「あるいテコテコ」がある。この題名は、「歩いて行こう」と「テコテコ歩いて」とが融合した表現で、語順を入れ替えることで、掛詞を含む簡潔な表現になっている。この表現には聴者や読者に考えさせる効果も見られる。この歌の「作詞・作曲・うた」のすべてが、男性メンバー4人の全員が歯科医師免許を持ち、2016年にデビュー10周年目を迎えたボーカルユニット GReeeeN (グリーン) によって制作されている。

このGReeeeNという名前には、「新人・未熟者」という緑(グリーン)の意味

が含まれており、その意味から派生した「未完成」や「未知の可能性」という意味も内包されている。このロゴマークの4つの小文字のeは、「ユニットの構成メンバーである4人」と「smile(ほほえみ)」を暗示している。GReeeeNの姉妹グループとして、「whiteeeen」が2015年に生れており、この4つの小文字のeにも、同じ意味が内包されている。

このように感性の表現には、意味の重層性が見られることが多い。感性の表現を生み出す側だけではなく、受け手側においても、意味の重層性が見られる。この特性には、日本語の感性の表現の豊かさを説明する主要な要因が見られ、日本語の「察しの文化」の特徴が反映されている。このような主要な言語の特徴は、今後も継承される可能性が高い。

人名や商品名の命名にも、感性が働いている例が見られる。例えば、健康補助食品の名前には、ユグレナ(和名: ミドリムシ; 昆布やワカメと同じ藻の仲間)「緑の習慣」(タケダ薬品)がある。ミドリムシでは魚の「エサ」と思われてしまう可能性があり、学名のユグレナを用いて「緑の習慣」と命名されている。ビタミンや、ミネラル、青魚のサラサラ成分、必須アミノ酸などの多様な成分を含むと宣伝されている。遠感覚の視覚や聴覚の表現だけではなく、サラサラ成分の「サラサラ」のように、触覚に訴える感性の表現も駆使しながら、広告文が作られている。このような感性に訴える表現の使用がますます増えている。

宮澤賢治(1896-1933年)は、欧米の音楽への関心が深く、レコード鑑賞を楽しみ、「星めぐりの歌」という歌も作詞作曲

している。『セロ弾きのゴーシュ』という童話もあるように、チェロの演奏を行い、音感に優れていたことが、賢治の豊かでユニークなオノマトペの多用に繋がっている。『風の又三郎』の擬音語の「どっどど どどうど どどうど どどう」のように新造語が生れやすい分野である。

4. 感性の表現にも、それぞれの言語や文化の特性が反映していることを忘れないようにしましょう！

和食では、食材を盛り付けるお皿も重視されており、お皿の上に赤・緑・黄色の食材が、バランス良く含まれ、配置されていることが大切にされている。日本には感性を重視する伝統が見られる。その伝統を、言語表現を通して確認するという楽しみが、表現学にはある。

日本昔話の「桃太郎」では、「ある日のこと、おばあさんがいつものように川で洗濯をしていると、川上から、ドンブラコッコ スッコッコと、大きな桃が流れてきました」(p.16) と語られる。その英語訳では、“One day, as the old woman was doing the washing, a large peach came bobbing and tumbling down the river.” (p.17) (上下左右に揺れながらやってきた) と表現されている。この日本語の原文では、主観的表現の副詞のオノマトペを使っており、七五調のリズムを作り出すとともに、日本語表現の「察しの文化」の特性が反映されている。英語訳では、客観的分析型の動詞表現で論理的に言い表されている。

日本語のオノマトペが副詞で表現されることが多いという事実には、日本語は動詞中心構造を好む傾向があるという言

語特性が反映されている。それだけではなく、オノマトペは文の主役となる主要な要素ではなく、文の脇役となる補足的要素であることが暗示されている。

5. 感性工学やコーチングなど、他分野との融合研究も推進しましょう！

感性語を研究している分野は、表現学を含む言語学だけではない。感性工学や人工知能の分野の他に、幼児教育における応用や、コーチング (coaching)、リハビリテーションの場におけるコミュニケーションなど、積極的に感性語を活用する取り組みが報告されている。現代文明都市においても、感性の溢れる心豊かな生活を求める機運が高まっている。

選手の指導者たちも、言語技術を大切にしている。「フニャと投げて！」と表現して理解できる選手と、「腕の力を抜いて投げて！」と言われるほうが理解しやすい選手がいることが報告されている。食文化の研究者の中には、土山しげる(著)『喰いしん坊！』(ニチブンコミックス) に用いられている味覚表現を調査している人もいる。他分野の研究にも役立つ表現研究が望まれている。

最後の注意として、以下で三つの項目を言及しておきたい。カント (Immanuel Kant: 1724-1804年) が理性・悟性・感性に分類した時代や社会においては、理性が最も重視されていた。しかし、日本では伝統的に感性を重視しており、21世紀の現代社会では、理性よりも感性を重視する傾向も顕著になっている。感性の表現を研究することは、その有効性や効果、有効な分野を明確にすることを含んでいる。感性の表現に関する先行研究は

可能な限り、徹底的に調査する必要がある。「バタバタやっています」の「バタバタ」は、擬音語から擬態語に推移している。構造主義言語学の父と称されるスイスの言語学者、ソシュール (Ferdinand de Saussure: 1857-1913年) の社会的記号体系としてのラング (langue: 言語素材) の視点では、感性の表現は「脇役」に過ぎないが、文脈を重視する語用論の視点から眺めると、突然、脇役から主役に転じる場合がある。感性とは、人間の内面に潜んでいる思いであり、人間が意思を決定する際に大きな影響力を持っている要素でもある。その感性の表現研究には、豊かな発展性が開かれている。

主要参考文献 (あいうえお順)

- 天沼 寧 (編) (1974) 『擬音語・擬態語辞典』東京：東京堂出版。
- 浅野鶴子 (編) (1978) 『擬音語・擬態語辞典』東京：角川書店。
- 飯島英一 (2004) 『日本の猫は副詞で鳴く、イギリスの猫は動詞で鳴く』東京：朱鳥社。
- 後路好章 (2005) 『絵本から擬音語・擬態語ぷちぷちぱーん』東京：アリス館。
- 楳垣 実 (1961) 『日英比較語学入門』東京：大修館書店。
- 芋阪直行 (編著) (1999) 『感性のことばを研究する—擬音語・擬態語に読む心のありか』東京：新曜社。
- 尾野秀一 (編著) (1984) 『日英擬音・擬態語活用辞典』東京：北星堂書店。
- 小野正弘 (2013) 『NHKカルチャーラジオ オ：詩歌を楽しむオノマトペと詩歌のすてきな関係』東京：NHK出版。
- 小野正弘 (2015) 『感じる言葉 オノマトペ』(角川選書 561) 東京：KADOKAWA。
- 笈 寿雄・田守育啓 (編) (1993) 『オノマトピア—擬音・擬態語の楽園』東京：勁草書房。
- 加藤寛二 (2009) 『都市感性革命—二十一世紀を生き抜く子どもたちのために』東京：文芸社。
- 黒川伊保子 (2004) 『怪獣の名はなぜガビグゲゴなのか』東京：新潮社。
- 佐々木健一 (2010) 『日本の感性』(中公新書 2072) 東京：中央公論新社。
- 柴田 武 (1995) 『日本語はおもしろい』(岩波新書：新赤版 373) 東京：岩波書店。
- 千葉幹生 (編著) (2010) 『CD付き英語で楽しむ! 日本昔ばなし』東京：ナツメ社。
- 中島一裕 (2017) 「日本語感覚表現論の構想」帝塚山大学『文学部紀要』第38号、pp. 51-63.
- 藤野良孝 (2013a) 『脳と体の動きが一変する秘密の「かけ声」』(青春新書) 東京：青春出版社。
- 藤野良孝 (2013b) 『子どもがグングン伸びる魔法の言葉』(祥伝社黄金文庫) 東京：祥伝社。
- 三戸雄一・笈 寿雄 (編集主幹) (1980) 『日英対照：擬声語(オノマトペ)辞典』東京：学書房。
- 吉村耕治 (編著) (2004) 『英語の感覚と表現—共感覚表現の魅力に迫る』東京：三修社。
- 吉村耕治 (2015) 「日英語の比較の観点から見たオノマトペ—感性の表現の魅力」表現学会『表現研究』第102号、pp. 7-18。
(関西外国語大学短期大学部名誉教授)

◇表現研究関連文献紹介

定延利之著『コミュニケーションへの言語的接近』（ひつじ書房、2016年3月刊、4800円＋税）

認知や会話をも視野に入れ多彩な言語現象の分析を続ける著者の集大成（中間総括）である。本書を読み進めながら、著者が構想するのは非ユークリッド幾何学なのではないか、と感銘を受けた。

三角形の内角の和が180度となるのは三角形を平面に描いた場合で、球面上に描かれれば内角の和は180度を越え、球面の内側に描かれれば180度未満になる。「平行線公理」と呼ばれる古典幾何学の前提を疑うことで非ユークリッド幾何学は始まった。本書も、従来のコミュニケーション研究・文法研究において「公理」とされてきた前提を疑っていく。それは、コミュニケーションには、伝達、意図、共在、行動といった前提が存在するという考え方である。（注：本書では「公理」という言葉は使っていない。）

これらの「公理」の下では非文法的と判断される例が会話に普通に見られること、また「公理」からでは説明できない表現やルールが会話の中に多数存在することが膨大な例によって示されていく。

例えば、「伝達者の無権利性」と呼ばれる規則がある。患者から「この薬、他の薬と一緒に飲んで大丈夫ですか？」と聞かれた時、「えーと、その薬なら大丈夫ですね。」と答えられるのは判断に責任を持つ者に限られ、例えば医師の答えを伝える看護師が、フィラー「えーと」や終助詞「ね」を付けることはできない。これは、情報伝達上の必要性ではなく、話者の心的態度から説明されるべき規則である

う。このルールに対する違反は情報の混乱ではなく、分をわきまえないといった印象を生むからである。ただし、このルールを従来のコミュニケーション観から説明するのは難しい。

これ以上の例は提示できないが、従来の「公理系」では十分な説明の得られない例を、本書はこれでもかと示していく。ユークリッド幾何が平面に縛られていたように、コミュニケーションの「公理」が分析対象をいかに限定していたか、実感せざるを得ない。特に、フィラー、パラ言語、役割語、キャラ語などの分析では、従来の「公理」から離れることが必須であると思われる。

では、従来の「公理」に変わるものとは何か。著者は発話に対して、情報の伝達などではなく「あらかじめやってみせること」という新しいコミュニケーション観を提案している。自分の立場や内面などを「あらかじめ」示すことが、情報伝達よりも優先されるというコミュニケーション観である。

この発想はレトリックの基本概念であるエトスに重なる。エトスとは話者の性格 (disposition) を描くことによる説得である。ロラン・バルトはエトスについて、弁論家は演説の中で「絶えず、私に従いなさい、私を尊敬しなさい、私を愛しなさい、といい続けなければならない」（『旧修辞学』p.123）と述べる。日常会話であれば、「私はあなたに対し、こういう意識・姿勢でいますと、示し続けなくてはならない」となるだろう。

言語学の非ユークリッド幾何は、言語学とレトリックの融合なのかもしれない。（柳澤浩哉）